ダニエル・フィッシャー氏　講演会報告

「コミュニティにおける　生（ライフ）の対話的リカバリー」

主催：大阪府立大学教育福祉学類　松田研究室・三田研究室

2015 年 5 月 17 日（日）、教育福祉学類、松田研究室と三田研究室の主催で、世界的な精神障害当事者運動のリーダーであり、精神科医でもあり、リカバリー（回復）概念の提唱者の一人としてわが国でも広く知られる、ダニエル・フィッシャー氏（アメリカ、マサチューセッツ州在住）を招き、講演会を開催しました（学術交流会館多目的ホール 13:00～16:30）。タイトルは、「コミュニティにおける　生（ライフ）の対話的リカバリー」（Dialogical Recovery of a Life in the Community）でした。約 180 人の参加がありました。専門職者（ソーシャルワーカー、看護師、精神科医など）、精神障害当事者、その家族など、様々な立場の方がたが参加されました。関東からの参加もありました。通訳はステファン・ラル氏でした。

フィッシャー氏は、精神疾患の生化学的メカニズムを明らかにするために、ドーパミンとセロトニンの生合成に関して博士号を取得し、国立精神保健研究所（NIMH）において研究をおこなっていましたが、25 歳のとき統合失調症と診断され、計 3 回の入院を体験しました。入院中に、精神医療や社会を人間的なものに変えたいという強い思いをもち、退院後に医学を学んで医師となり、ハーバード大学医学校で精神医学を修了しました。精神科医としての診療活動だけでなく、一方で、国の精神保健政策を変革するためにナショナル・エンパワメント・センターの立ち上げに関わり、ブッシュ大統領の諮問委員会であった「精神保健に関する新自由委員会」（2002-3 年）の委員も務めました。その後、当事者組織の連合体である全国精神保健リカバリー連合会の立ち上げにも関わりました。

講演では、フィッシャー氏自身の個人的な体験やこれまでの人生が語られ、かつ、参加者との対話が展開されました。ときには涙を流しながら語られることもありました。そのような語りや対話を通してフィッシャー氏と参加者との間で生じたのは、精神保健システムにおいて人と人との間の情緒・感情的なつながりが欠落しており、それによってリカバリーが妨げられているのだという問題提起であり、そして、そのようなつながりがあれば人はリカバーできるのだという希望の共有でした。フィッシャー氏は、終始、参加者に問いを投げかけ、参加者からの質問に非常にていねいに応答されていました。講演の中で、フィッシャー氏が開発に関わり、普及に努めている「エモーショナル CPR」（eCPR）が、ロールプレイを交え、紹介されました。eCPR は、人が情緒・感情的なクライシス（危機）にあるときに周囲の人たち（家族、友人、近隣の人、専門職者など）が、本人とどのようにして人間的なつながりをもつのかを身につけるためのアプローチ

であり、投薬や入院を中心とする伝統的な精神医療に対するオルタナティブ（＝代替的な実践）です。本人を「治す」ことではなく「ともにいる」ことに力点が置かれています。

参加者アンケート（回収率 64%）からは、参加者にとって、本講演会が、精神保健福祉の実践においてのみならず、人が生きていくうえで大切なことを学ぶことができる場になったことがうかがえました。

今から 12 年前、アメリカ西海岸において、投薬ではなく人間的なつながりに基礎を置く「ソテリア・ハウス」の実践をおこなった精神科医、ロレン・モシャー氏が同じ場（学術交流会館多目的ホール）に招かれ、講演会が開かれました。今回、同じ場にフィッシャー氏を招き、このような講演会を開くことができたことをうれしく思います。

教育福祉学類教員
松田　博幸